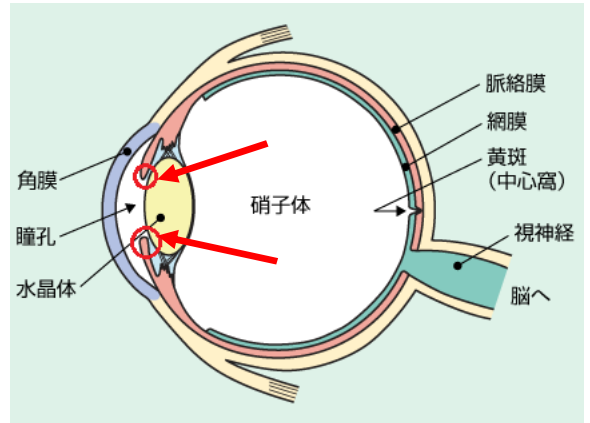


今回は私が実施している勉強会の際に出た質問について、調査した範囲内で回答をします。

ミドリンP点眼が継続して処方されるケースがあるが、眼底検査などの他にどのような症例に投与されるのか？

何らかの原因で虹彩に炎症が起こるとフィブリンなどが析出しやすくなり、虹彩の後部と水晶体が癒着する虹彩後癒着という症状が出る場合があるそうです(右図の矢印部分)。そのまま放置しておくと緑内障になってしまいますので、散瞳薬(ミドリンP点眼など)を利用して虹彩を縮めるようにして動かして癒着を防ぎます。その時、炎症を抑えるためにリンデロン点眼液なども併用される場合があります。



ベーチェット病における眼の炎症では発作と寛解を繰り返しますから、発作時の利用や癒着予防のため、連続した処方もあり得るようです。

ミドリンPの散瞳作用は、抗コリン剤トロピカミドによる瞳孔括約筋の弛緩による散瞳作用と交感神経刺激剤フェニレフリンによる瞳孔散大筋の収縮による散瞳作用の相乗効果によります。その効果は1回の点眼で2時間ほど続き、5～8時間で元に戻るとされます。従って、まぶしさも続き周囲が見えにくい状態が続きますから散瞳が治まるまで自動車運転は控える、サングラスの使用を奨めるなどの指導が必要になります。実際に使用してみてどれほどまぶしかったかを確認するのも良いと思います。

参考資料：今日の治療指針 2011（医学書院）などより。

男性の更年期障害について知りたい。

男性の更年期障害は近年「加齢男性性腺機能低下症候群：LOH（late-onset hypogonadism）症候群」と呼ばれています。

症状としては身体的には全身の疲労感や倦怠感、性欲低下、ED（勃起障害）、不眠、肩こりなど、精神的には気力の衰え、集中力の低下、イライラ、抑うつなど、症状は多岐にわたります。

原因は男性ホルモン（テストステロン）の低下で、男性ホルモンは20歳代でピークを迎えてから徐々に低下していき、加齢と共に症状が現れやすくなります。

誰もがその症状を呈するわけではないようですが、引き金となるのは、過剰なストレス（職場環境や家庭環境）が多いようで、なりやすいタイプとしては概して几帳面、ストレスをためやすい人が多いとされ、デスクワークの多い職業や管理職の人が圧倒的に多い傾向があるとされています。

治療薬としては女性の更年期障害の際に利用されるホルモン補充療法と同じく、男性ホルモン補充療法（ART）があります。テストステロンの注射剤や軟膏剤を利用します。副作用としては多血症（赤血球が増加）、睡眠時無呼吸症候群の悪化、まれに肝障害などが知られています。また男性ホルモン補充によって前立腺癌の発生が増加したという報告はありませんが、前立腺癌の腫瘍マーカーPSAが2ng/mL以上では男性ホルモンの補充療法は行わないそうです。

自覚症状などにはそれぞれに対応する薬剤が利用されるようですが、補中益気湯などの漢方製剤も男性更年期患者に有効と考えられているのは女性の更年期障害と同じようです。

参考資料：帝京大学附属病院泌尿器科ホームページ記事等より

「耳鳴り」に「補中益気湯エキス」を処方された人がいたが、どのような説明をしたら良かったのでしょうか？

耳鳴りは軽度の症状以外は結構、難治性である場合が多く、どんな薬を利用しても治らず耳が騒がしくて不眠状態が続くと訴える患者さんも少なくありません。耳鳴りに良いという体操や医薬品(OTC漢方薬含む)などが体験論的に紹介され通信販売されていたりもします。

さて、漢方医学的(正確には中医学的か?)な耳鳴のとらえ方は以下の四つのタイプがあるようです(参考にした資料により表現が異なるので、私なりに寺澤著書：和漢診療学の内容に合わせて分類の表現を変更しました点はご了承ください)。

①肝の陽気が過剰になっておこるタイプ

漢方の肝は西洋医学の肝臓の概念と異なり、精神状態の安定性を司ります。つまり脳の機能を正常に保つ作用といえます。臓器は陽気(目に見えないエネルギー)と陰液(血水で構成される液体成分で気の過剰な作用を抑える作用あり)がバランス良く保たれていると健康な状態を保つのですが、肝で陽気が過剰になると脳内の神経が活発となり、それが耳鳴につながるという考えです。ストレスや情緒不安によって誘発される耳鳴とも言えます。⇒抑肝散、釣藤散、加味逍遥散

②水の動きが滞るタイプ

水とは体に潤いや栄養を供給する透明な液体成分で、本来は体を巡っている物質ですが、何らかの原因で水の流れが耳の付近で滞り、熱を帯びた状態となり、それが耳鳴につながるという考えです。耳の閉塞感が強く、頭重感を伴う耳鳴とも言えます。⇒黄連解毒湯、苓桂朮甘湯、五苓散

③腎の気が不足するタイプ

諸臓器を動かすエネルギー源である気は、大気(肺が取り込む)と食物(脾が取り込む)から得ます。それらとは独立して腎も自ら気を発生することができます。五行説では五臓の1つの腎と五官の1つの耳は互いに関連しあうとされています。従って、何らかの原因で腎が衰えると気が不足し、その気の不足が耳に影響を与え、耳鳴につながるという考えです。昼夜の別なく常時つづく耳鳴とも言えます。⇒八味地黄丸、六味丸、滋腎通耳湯(エキスには無し)

④脾胃が弱ってしまったタイプ

脾は食物からの気を取り込む臓器で、胃も気の生成を助けます。気は血や水を生成する原料にもなります。脾胃が虚弱になると気血の巡りが悪くなり、脳内への影響の1つとして耳鳴につながるという考えです。疲れがたまったり時に増悪するような耳鳴になります。脾胃の作用を活発にする方剤(⇒補中益気湯)や血の流れを改善する方剤(⇒女神散など)が用いられます。

今回の質問の「補中益気湯」は脾胃の作用を活発にして、気を益して体を元気にしてくれる漢方薬ですから、④の脾胃が弱ったことによって生じる耳鳴に対して利用される漢方薬になります。

参考資料：楊中医鍼灸のホームページ記事などを参考に構成。寺澤著：和漢診療学第3版。